

〈アクチュアル脳・神経疾患の臨床〉 小脳と運動失調 小脳はなにをしているのか

西澤正豊 ● 専門編集
辻 省次 ● 総編集

国際医療福祉大学大学院長 金澤一郎



「小脳はなにをしているのか」という問いに、現在のわが国の英知を集めて挑戦したのが本書である。専門編者である西澤正豊先生が序で書かれたように、わが国には伊藤正男先生という小脳の基礎研究の巨人と、脊髄小脳変性症（SCD）の運動失調に対する治療薬の TRH を世に出された祖父江逸郎先生という小脳疾患研究の巨人がおられる。このことが日本での小脳機能あるいは小脳疾患への関心を高めてきた。その表れが厚生労働省の「運動失調症調査研究班」であり、昭和 50 年に始まった後、現在までに挙げた功績は数限りない。特に疫学的研究と脊髄小脳変性症各病型の病因遺伝子に関する業績は世界に誇るべきものである。

そうした業績の中で、忘れられている疫学調査の結果が一つある。多

系統萎縮症（MSA）には、自律神経症状で始まり、ほぼ 2 年以内に小脳症状や錐体外路症状が加わるという概念で集積した「SDS」があり、その頻度が日本では全 SCD の 7 % 弱に及ぶ。しかもその 80 % 以上が男性であるという事実は見過ごせない（平成元年の平山班の統計）。SDS をないがしろにするのは勝手だが、ここに新発見のヒントがあるに違いないと私は思う。いつか挑戦して欲しいと思っている。

本書は、非常に緻密に物を考える西澤先生の編集になるだけあって、ほぼ完璧な構成になっていて、「わが国が誇る小脳研究の金字塔」と言って良い。小脳の機能局在、症候学、検査法、臨床と分子生物学を合わせた病態、治療、それに非常に役に立つ 7 例の case study が続く。それだけではない。ほとんど全ペー

ジがカラー印刷である他、ポイント、コラム、メモ、キーワード、などきめ細かい配慮によって理解を助ける仕掛けも豊富である。また、各ページの外側には 4 cm 以上の余白があって、自分でメモができるようになっている。これほど配慮の行き届いた本を私は知らない。だから、索引を入れて本文 336 ページの本書が 12,000 円というのはやや高いという印象があるかも知れないが、その内容を見れば納得する。本書を、是非とも蔵書に加えられることをお勧めする。

B 5 頁 352 2013 年
定価 12,600 円
(本体 12,000 円 + 税 5 %)
[ISBN978-4-521-73442-2]

中山書店刊